

中学校におけるダンス授業の学習内容の検討

—愛媛県内中学校における ダンス授業の実態を中心にして—

筑波大学大学院 木山 慶子
筑波大学 頭川 昭子

I. 目的

現行の学習指導要領では、心と体を一体として捉えることが重視されている。学校体育におけるダンスは、まさに心身一体化の表現活動であり、成長期の子どもの育成に重要な役割を果たすことが期待されている。そこで、本研究は、現行の中学校学習指導要領のダンスの内容、愛媛県の中学校におけるダンス授業の実態を把握し、両者の関係を明らかにすることによって、中学校ダンスの学習内容についての今後の課題を導き出すことを目的とする。

II. 研究方法

1. 現行の中学校学習指導要領を資料として収集し、ダンスに関して分析し、内容を検討した。

2. 愛媛県内の県立高等学校4校の1年生383名を対象に、中学校3年間のダンスの授業に関する質問紙調査を行い、回答を分析、検討した。

3. 中学校学習指導要領と実態調査結果の関係を明らかにし、中学校ダンスの学習内容についての今後の課題を導き出した。

III. 研究結果とその考察

1. 現行の中学校学習指導要領におけるダンス
現行の学習指導要領は、1998年（平成10年）、第6次改訂のものである。ダンスの内容は、創作ダンス・フォークダンス・現代的なリズムのダンスの3つであり、内容の取扱いは、1学年は武道・ダンスから一つ、2・3学年は球技・武道・ダンスから一つ、の選択制になっており、対象は男女とされている。

2. ダンスの授業に関する調査

1) 中学校でのダンスの授業の経験

中学校におけるダンスの授業の経験は、回答者数383名中、338名を数え、9割近くの生徒がダンスの授業を経験していた。また、学年別では、1年生で経験した生徒が189名(55.92%)、2年生192名(56.80%)、3年生249名(73.67%)であった。

2) ダンス授業の内容・最終目標

ダンス授業の内容、及びその最終目標について1年生では、創作ダンスが118名(62.43%)と最も多く、目標はクラス内発表が131名(69.31%)と最も多かった。2年生では、創作ダンスが113名(58.85%)、クラス内発表が123名(64.06%)、3年生では、創作ダンスが171名(89.06%)、クラス内発表が155名(80.73%)と最も多かった。いずれの学年も創作ダンス、目標はクラス内発表

が多く見られた。

3) 授業でダンスを「踊る」「創る」「観る」ことについて

授業で「踊る」ことに関しては、「友達と踊る」ことは関心・態度が高いが、能力は低く、「一人で踊る」「人前で踊る」ことでは、関心・態度・能力ともに低かった。「創る」ことでは、「友達と創る」ことには関心・態度が高いが、能力は低い結果となり、「一人で創る」ことは、関心・態度・能力ともに低い結果となった。また、「観る」ことは、関心・態度のいずれも高い結果となった。

4) 授業で「一人で」「友達と」の活動について
授業で「一人で」踊ったり創ったりすることは、関心・態度・能力ともに低く、また「踊る」よりも「創る」ほうが低かった。「友達と」では、能力は低い結果であったが、関心・態度に関しては高い数値を示した。

5) ダンスの授業の自己評価

「友達と協力して仲良くできた」「友達とお互いに教えたり助けたりした」「楽しかった」「友達の言葉が役立つ」などが高い評価となった。

6) 授業の内容

「既成音楽を使う」「5～8人で活動する」「友達のダンスを見る」などが多く、「1人で活動する」「道具を使う」などが少なかった。

7) 今後のダンスへの参加について

中学校でのダンスの授業を終え、今後もダンスの授業への参加希望の有無は5段階評定の平均値3から+0.27となり、参加したい方向にみられ、学校以外でのダンスのレッスンへの参加希望の有無は-0.79となり、参加したくない方向にみられた。

3. 学習指導要領と授業との関連

ダンスは学習指導要領の中で選択制となっているが9割近くの生徒がダンスを経験していた。授業の内容では、指導要領における内容の「創作ダンス」が最も多かった。

IV. 結論

調査回答者の9割が中学校でダンスの授業を経験していた。ダンスを「観る」ことについては関心・態度とも高かったが、「踊る」「創る」では、関心・態度・能力すべてに高いとは言えず、今後の学習内容の検討が望まれる結果となった。

